

マルクス学位論文における科学論
加戸 友佳子（神戸大学大学院博士後期課程）

本報告では、K.マルクスの学位論文『デモクリトスとエピクロスの自然哲学の差異』（以下学位論文）から、マルクスが示している科学観について検討したい。マルクスの科学論においては通常、『資本論』における唯物論的歴史観や唯物弁証法、初期においては『経済学・哲学手稿』が議論の俎上にのぼることが多いが、学位論文はこれらとは異なる科学論の視点を提供するものと考えられる。それは、知を行う主体と自然界との関わり、認識論と存在論の関わりである。

学位論文の方法論的意義はヘーゲル弁証法のエピクロス哲学に対する適用であり、そのため観念論を抜ききっていないとする評価が大半である。報告者はこの時期のマルクスの見方が、観念論と唯物論の両方を対象化するものであり、またそれは、のちのマルクスの科学とは異なる意味で、非決定論的な科学観に親和的であると考えている。マルクス自身、学位論文の冒頭の献辞において観念論を称揚しており、内容においてもヘーゲル弁証法の強い影響がみられる一方で、当論文が対象としているエピクロス哲学は原子論であり、实在論であるという違和感は抜きがたく残っている。

先行研究が学位論文から得てきた示唆は、主に実践的で、啓蒙主義的なものであった。それらは人間のより良き生のために知がどのような役割を果たすか、というマルクスとエピクロスの共通の問題意識を読み取る。知は個人の自由を抑圧する必然性からの脱出として存在し、それがエピクロス哲学全体を貫いているものと解釈される。近代科学の啓蒙と異なるのは、矛盾や例外の存在を正常のものとし、それらに重要な位置を与えていることである。

報告者は学位論文の意義がそれ以外にもあると考えている。マルクスはデモクリトスの経験主義・実証主義を批判し、エピクロスの認識論をそのオルタナティブとして評価するという論法をとっている。それによってエピクロス原子論の動的な（時間を重視する）側面、関係論的な側面が現れており、それらは構築主義やエコロジ的な先行研究によって評価されている。

その中で強調されるのは、一元的な唯物論とみえる原子論を採りながら、エピクロスは様々な意味での非決定性と矛盾を意識的に持ち込んでいたということである。本報告では、マルクスのデモクリトス批判とエピクロス原子論評価の対比に焦点を当て、詳細に検討していきたい。そして、個々人の感覚するものを現実のものにとらえるエピクロスの考え方に親和的であると思われる近年の思想潮流、新しい实在論との関係も考察したい。